北海道における縄文世界遺産の拠点形成に関する懇談会（第１回）議事概要

１　日　時　令和６年７月 30 日（火）１６：００～１８：００

２　場　所　道庁本庁舎３階 テレビ会議室

３　出席者

＜有識者＞　木野委員、小林委員、田代委員、永原委員（ｵﾝﾗｲﾝ）、西山委員、水口委員

＜事務局＞　黒須 文化局長、栗原 縄文世界遺産推進室長、阿部 特別研究員

４　概　要

（1）議事１　北海道における世界遺産について（報告）

【事務局】

縄文文化は、約 15,000～2,400 年前まで、日本列島で続いた先史文化で、採集・漁労・狩猟を基盤とした定住生活が特徴。縄文文化には６つ程度の地域文化圏があるとされており、ユネスコ世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」（以下、縄文世界遺産という。）は冷温帯落葉広葉樹林が広がる北海道南部、青森県、秋田県北部、岩手県北部の 1 万年以上わたる定住生活の変遷を顕著な普遍的価値（OUV）の骨格にしている。ユネスコの世界遺産の目指すところは、地球上の様々な地域があってそれぞれに特有の歴史や文化があると。そのどれもが尊いということを各国が理解しあうということによって、相互理解を図っていくということで、縄文世界遺産の保存と活用も最終的には UNESCO のミッションに繋がっていくことが大切であると考える。

（委員より意見等なし）

（2）これまでの経緯と拠点形成方針（素案）について

【事務局】

道では、令和３年３月『北海道における縄文世界遺産の活用のあり方』、令和５年３月『北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方』を策定。本道における縄文世界遺産の保存活用のために必要な７つの機能を、UNESCO『世界遺産条約履行のための作業指針』を踏まえて整理したところ。その後、道内に所在する構成資産・関連資産（以下、道内資産という）を所有・管理する市町と意見交換を進め、令和６年６月「北海道における縄文世界遺産の拠点形成方針（素案）」（以下、素案という）として公表。

素案では、道内資産全体を統括する機能は、縄文世界遺産推進室を中心に強化するとともに、北海道博物館や道立埋蔵文化財センターなどの道の専門機関等との連携を強化。また、道内資産が広域に所在していることから、道央と道南の２つのエリアに分けて取組を進める。道央エリアでは、縄文世界遺産推進室を中心に拠点機能の強化し、縄文世界遺産の価値や魅力の発信や札幌圏を基点とした周遊の促進、地域活動などの支援を行う。道南エリアでは、函館市に新たな拠点施設を設置し、縄文世界遺産の価値や魅力の発信や道南を基点とした周遊の促進、地域活動などの支援といった拠点機能の強化を図る。また、構成資産と一体となった世界遺産教育等を通じて、保全と活用を担う人材を育成する。

本懇談会及び関係市町から意見をお伺いし、令和６年 11 月も「北海道における縄文世界遺産の拠点形成方針（案）」を、12 月に成案としたい考え。

【進　行】

説明をさせていただいた素案に基づき、各委員にご意見を伺う方向性で進めさせていただきたいが、よろしいでしょうか。

【委　員】

（異議等なし）

【進　行】

道がより具体的に取り組むべきもの、それから参考にすべき取組など、各意見を頂戴していきたい。

【西山委員】

拠点形成のハード・ソフト整備には、その全体の方向性をしっかりと示すマスタープランが必要。マスタープランとは、計画ではなく、5 年後か 10 年後か 100 年後かに、こういう姿に向かって進みたいという将来像であり、来訪したいと思っている方々に持って欲しいディスティネーション・イメージ。関係者間でも議論してイメージが共有されることも必要。また、道内資産だけを対象とするのか、北東北、更に日本全体の縄文を視野に入れるのかを考える必要もある。少なくとも拠点では日本全体の縄文の説明もして、そのスタート地点になるという意識も必要。

【田代委員】

日本は特に埋蔵文化財については他国にないような行政体制をとっており、海外からわかりにくいところでもある。『北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方』では、UNESCO『世界遺産条約履行のための作業指針』が引用されており、努力の結果が表れている。一方で、国-道-市町村という形であったものを、道中心に拠点を形成して、国内外の様々な機関と連携していくことは非常に難しい点もあるように思う。日本においては奈良文化財研究所や文化財防災センターといった国内の文化財関係機関、さらに ICOMOS[1]や ICCROM[2]と連携していく必要がある。

また、見えない埋蔵文化財という強みを生かしながら、一般に対して北の縄文[3]というイメージ、世界の縄文というイメージを拠点中心にしてつくり出していくのが拠点の役割だと考える。特に、縄文世界遺産はシリアルノミネーション[4]なので、必ず北海道だけではなく、北東北も含めたイメージでなければならない。そのためにも道南エリアに拠点を置いて、東北とのアクセスの重要な拠点として発展させていく必要性はある。

【永原委員】

どのような方々を、どれ程人数を受け入れるかという地域的のキャパシティーをきちんと設定することが大切。それをせずに、「より多く受け入れたい」という考えで進めると、観光の

---

[1] International Council on Monuments and Sites（国際記念物会議）。文化遺産および遺跡の保存に関わる専門家の国際的な非政府組織。UNESCO の諮問機関として世界文化遺産の登録審査や保全状況の調査も行っている。

[2] International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property（文化財の保存及び修復の研究のための国際センター）。文化遺産保全の専門家の育成や保全のための研究、記録を行っている国際的な非政府組織。UNESCO の諮問機関として、文化遺産の保全状況の監視も行っている。

[3] 、「縄 文世界遺産」を含む北海道全域に存在する縄文遺跡・文化の総称「北海道の縄文」のこと。『北海道における縄文世界遺産の活用のあり方』では、世界遺産 登録による縄文文化への注目の高まりを、将来的に道内全域に波及させていく必要がある、としている。

[4] 地理的に離れた複数の物件で OUV を形成する世界遺産のこと。

安売りや地域の疲弊が起きる。そのため、どのような方々に来て欲しいのか、数なのか、質なのか、きちんと足並みをそろえた上で、プロモーション等を進めることが大事。

富裕層ついては、二次交通が問題となることが多い。空港到着後のハイヤーの数が不足している、宿泊施設のクオリティーが一定水準に達していない等が、よくある懸念事項。食は、様々な嗜好があるので、些末なことに思われがちだが、実はすごく大切。そういった最低限のラインが担保されて、初めて体験に没入できるようになる。きちんと足場を固めてからプロモーションしていき、受入体制を作っていくというところが非常に大切。

これまでは東京、京都、直島[5]というディスティネーションの名前が挙がっていたが、北海道もよく耳にするようになった。海外の方は、日本のことはほとんど知らないため、トラベルデザイン会社が主要都市以外にあと1カ所推薦することが多い。富裕層を取り込む上では、トラベルデザイナーやトラベルエージェンシーに認識してもらうことが非常に重要。

世界的には、スピリチュアルなこと、精神性を高めていくような旅、知的な旅、知的好奇心を満たしていくことができる旅は需要が非常に高い。縄文世界遺産もそれにすごく合うものだと感じている。

【水口委員】

縄文世界遺産をどうしたいかという将来像が見えないので、そこをきちんと検討すべき。

縄文世界遺産に関心があるアドベンチャー・トラベル[6]の旅行者層は存在する。ただし、縄文だけで3日間過ごすことは難しい。地元の生活文化に触れるような体験に縄文を結びつけたストーリーがとても重要。そのためには、従来の教育旅行を意識したものから、縄文世界遺産の価値の表現方法を見直した方がよい。また、そこに関わる仲間、地域の人を増さないと、地元の誰も関わってないようにしか伝わらない。一緒にやりましょうという話をし続けることが必要で、熱意と時間と労力がかかる。これらは拠点の役割なのか確認したい。

縄文のストーリーと結びつけて地域の生活を体験することが、アドベンチャー・トラベルの旅行者層が求めること。それに対応した体制を市町の方々と積み上げ続けていく必要がある。地元で受け入れるプレイヤーは、幅広いはず。二次交通やホテル、食事など。これまで文化財の保存活用を議論してきた方々以外との関係を繋ぐ必要があるため、そういった方々とどれだけ信頼関係を構築できるかがとても大事。

受け入れ側が準備すべきことは多い。関係者の取組の機運を醸成、地元でお客様を歓迎しようという機運の醸成、縄文に直結するコンテンツの整備、縄文に結びつけて縄文以外を体験するコンテンツの整備。また、それぞれのクオリティーの向上、魅力的なガイドの育成、関係者が地元で繋がり合っていることも必要。売り出す方法、体制の構築、地元だけではできないこともある。きちんと取組主体や手順を分解して取り組んでいくべき。

【木野委員】

全4回の懇談会でどこまで本当に固まるのだろうとは思った。

縄文世界遺産は、地域住民のプライドというか、誇り、未来に繋がるものでなければいけないと思う。また、このプロジェクトは地域住民と一緒に進めていくものであるべき。そうでな

[5] 瀬戸内海にある香川県の島。現代アートと古い町並みが融合した独特の風景が楽しめることが人気。

[6] 『アクティビティ』『自然』『異文化体験』の3つの要素のうち、2つ以上を組み合わせた、アクティビティを通じて自然体験や異文化体験を行い、地域の人々と双方向で触れ合い楽しみながら、その土地の自然と文化をより深く知ることで自分の内面が変わっていくような旅行形態。主にヨーロッパや北米、オーストラリアを中心とした富裕層に人気が高まっている。

いと、突然拠点施設ができました、え？　みたいなことになる。

そこで、地元の心情的なことも含めて、これから 30 年、100 年のことをイメージしなければならない。南茅部や函館にとって、縄文の世界遺産「も」ある、その「も」が実はすごく大事のような気がしている。世界遺産「が」ではなく、世界遺産「も」であれば、それはその「も」の中に、住民の誇りとかプライドも拾っていけるような気がする。また、世界遺産「も」であれば、新しい取組や、未来に続いてくような、多様なプロジェクトを含むことができると思う。

縄文だけ、世界遺産だけが輝いていくものではなく、地域の有形無形の文化資源を拾う必要があり、その中で、住民の方々にとってカックウ[7]や縄文世界遺産が、今ひとつ宝になっていない、誇りになっていないということは、絶対に取り上げていかなければならない課題だと思う。それができるのが文化や文化芸術の力であり、これまで、そのような活動をしているところがある。また、多様な分野、領域の人たちに関心を持ってもらうこと。多様な世代のプレイヤー達に、この地域の活動がめちゃくちゃ面白そう、すごい気になると思ってもらう。そうすると自然とインフルエンサーになって、どんどん世界中に拡散していくことになる。

【小林委員】

国連平和都市会議のディスカッションを広島で実施した。フランスは危機感を感じており、特にパリは、地球温暖化に対して摂氏 50 度に対応できる街になっていないと考え、これから 20 年 30 年かけて、単に緑を増やす以外に、いかにして街を作り直すか、ということに非常に懸命にチャレンジしている。先進国のもうひとつの課題は、人口減少。それらの課題解決に縄文世界遺産の文化観、価値観を応用できないかという提言があった。定住して、大地（地球）や地域の環境と共生していた。現代の日本がそうなっているかというと、なってない。東京の食料自給率は一桁。そのような中で、地方は過疎化が進む、しかし豊かな緑もあるし、食料もある。摂氏 50 度に対応できるような都市や地域に作り直していく可能性は十分にある。縄文時代の人々が共有した価値観や文化観をどのように次世代に伝え、実践するのか、ということを考えることが非常に大事と思う。

黙っていると、次の時代を支える人は減り、いなくなる。ネイチャーポジティブというキーワードでチャレンジしようとしているビジョンや行動に、世界中の基幹投資家は投資し始めています。そのようなチャレンジをしようとする人たちもいる。「移動・移住する」をキーワードに、生まれ育ったところではないところで、スタートアップしようと考えている次の世代の人々も多い。そういう行動や活動とクロスさせながら、全国で最も多く人口が減少する東北・北海道、そこの価値を世界の標準的なものとし、新しいサンクチェアリにしていく、というぐらいのスタンスを考えている。1 万年続いた縄文時代を支えた価値観や環境観を日本、そして世界で共有して、社会を作っていくチャレンジは意義があるのではないかと思う。

千葉県木更津市に、大地や緑との共鳴をテーマにした KURKKUFIELDS という施設群がある。中心は地下図書館で、農業や森林と共生する価値観がどのような文化、世界、価値観を生むのかを体験できる。アーティストは、その中で、アートは次の世界、次の文化を作っていくということを体験する。それを宿泊、滞在しながら自分たちの目指すべき、作るべき社会や文化観を考えようとしていて、若い人たちをターゲットにしている。

[7] 国宝「中空土偶」のこと。土偶が出土した南茅部地区に所在する、函館市縄文文化交流センターで展示されている。

宝物としての世界遺産をとりまく卵の白身みたいな環境をハンズオンして、縄文世界遺産とそれを取り巻く新しい施設を加え、全体の価値を光るものにして、それに共鳴しダイブインする若者を募らせたい。

高校留学の取組もある。北海道で 9 市町村 23 校、生まれたところではなく、社会貢献や環境について本当に学びたいと思っている若者も多数いる。そのような受け皿として、縄文の価値観と歴史を深く吸い込みながら未来を考える場所や環境と合わせて考えることも大事なのではないかと思う。北海道が描くマスタープランは、既存の価値の展示と学習をつなぎ合わせたものではなく、地域の自治体が抱えている課題、現実的な社会といかに結びつけながら、縄文の価値を次の世代へとつなげて花を咲かせていくことができるかが重要だと考える。そうすると北海道としての総合的な政策になるわけです。世界遺産をどう展示するかという従来型の政策ではなく、もっと、北海道の価値そのもの、あるいは自然遺産をどうするか、それから次世代を作る、街に住んでいる人だけではなく、その街に住んで何かチャレンジしたいという人と、世界の投資家とネイチャーポジティブのようなことを考えている人たちとマッチングさせる、それぐらいの幅でビジョンとマスタープラン考えていく意味と価値があるのではないかと思っている。

【西山委員】

ディスティネーション・イメージをマスタープランとして考えるべきという話をしたが、縄文世界遺産として何を発信していくかが重要。かつての旅行は先人の事績や史跡を見学する、まさに教育旅行的であった。しかし、地域の方々と触れあう、食をいただく、一見縄文に関係なさそうなアクティビティでも、縄文を求めてきた観光客が、縄文を通じて地域を見たい、地域を通じて縄文を見たいというところに、うまく導くことができればよいと思う。

最初に説明されていた OUV に感じる凄さや魅力を拠点施設で発信することの中心にすべき。何を柱にインタープリテーションしていくのか、というようなことを議論しないまま進むと、最終的な展示をどうするのか、ということを議論しなければならないときに展示業者に丸投げして、展示業者が必死に調査したり、ヒアリングしたりして、バタバタとまとめていくということが起こりがち。懇談会があと 3 回である中で、発すべきメッセージの根幹となるストーリーのようなものを議論し、実際のビジネスの中で展開して、縄文というものが、民間の事業者の人たちとっても、必要なコンテンツになっていくようにすべき。単なる世界遺産とか、古代遺跡とか、先史時代の遺跡ということではなく、今の社会にこれだけ影響を与える、現代の社会の中で語ることができる遺跡・遺産だということが、小林先生が仰るような、自然遺産と一緒にして外の投資家から見たときに、非常にメッセージ性のある世界遺産、北海道にこのような遺産があるということの意味について気づいてもらえるのではないかと思う。

【木野委員】

観光という観点からは、滞在体験という時間だと思う。滞在体験をどのように作るのか、そのメニューをどれだけ構築することができるのか。確かに、縄文、縄文、縄文だったら飽きてしまう。垣ノ島遺跡も 3、4 回歩きましたが、地面の下のことを想像してください、という想像力がかなり求められる。であれば、それを最新のテクノロジーで面白く見せるなど、あの機能やばいよ、と世界中の人たちが来るようになるのも面白い。また、僕自身はずっと発掘していて欲しいと思ったりする。それが一番グッとくるのではないかと。

直島や越後妻有のように、多様なプレイヤー、多世代のプレイヤーの人たちに届いて、南茅

部、道南地域、なんか面白そう、新しい動きがある、自分も行ってみたい、となるとよい。

はこだて未来大学の先生からお聞きしたが、函館でカフェを営んでいる若い夫婦が、南茅部で、期間限定でカフェをやってみようかなと言っていると。カフェやチャレンジショップができるようなスペースがあるとか、北大の水産学部の研究所がありますが、水産業の人たちが、臼尻漁港で作ったものを海外の人たちに食べさせてみたいとか、そういったチャレンジができる、受け入れられるような器の大きさを準備する必要があるような気がした。

【永原委員】

議論を、総論と各論に分けると明快である。

総論としては、拠点機能として世界に発信していく縄文のメッセージが何か、これを機にきちんと固めるべき。

各論としては、地元の方々の生活をいかにこのエリアを訪れたお客様に味わっていただくかを検討する必要がある、どの体験でも縄文につながると思っている。日常の生活がないところには本物志向のお客は行きたがらない。直島の人気は、日常生活があり、アートがあり、島があるという、そのブレンドされた魅力があるから。これが単なる島で、生活がなく、単にアートがあるというのでは、体験としてはまったく異なる。

今回の懇談会では、まず総論を確定するというのが各論以上に大切。

(3) 今後の進め方について

【事務局】

次回の懇談会では、道南エリアにおける拠点施設設置に向けて、函館市内の構成資産などの視察と、道南エリアでの取組の方向性、道南エリアに求められる拠点施設の形態、道南エリアの拠点施設で実施すべき取組、例えば地域連携やエコツーリズムの可能性等について議論をいただきたい。日程は、８月下旬で調整。その後、第３回及び第４回は秋頃の開催を予定。詳細は後日改めて調整。

【水口委員】

今日の議論を踏まえて、次回に縄文世界遺産として何を伝えるかといった総論を議論する時間を作っていただきたい。

【進　行】

ありがとうございます。調整させていただきたい。